

名草台千人塚古墳と石棺群の調査報告

賀川光夫

一 遺跡の種類 圓墳及び組合式箱式石棺

一 地番 地目

大分県玖珠郡森町大字森字名草台四六番地(千人塚) 八二番

地 八一番地 八三番地 八六番地 一五八番地(石棺群)

乃び(甕棺) 開拓農場

森町南拓道場 開拓団共有地

一 所有者

名草台とは九州山脈の中央 森盆地北辺に古状を呈しなから盆地中央

(南)に延びる中一料長さ三料の洪積性の台地である。この台地は相当の

侵蝕が行われ居り 上面は準平野 基部は磨崖を呈し 全体として

テール状の台地である。この台地の最高部は円形の封土を有する

千人塚古墳の墳頂で海拔四〇九・四三米である。台地上は略平坦で比

高は最大三〇米で全体に石棺が群集している。

名草台古墳群調査

一 発見及び予察

名草台地に夥しい石棺群が存することには注意されたのは昭和三十四年、以来、同台地が開拓されてゆらることである。其後夥しい石棺群の発見と破壊が開拓の進展と共に行われていたのであるが、未前に防止出来なかつたのは極めて残念なことであつた。然し其の間、大分大学学芸学部等の表面調査が行われてゐたが非公式な部分調査であつた。大分大学に於ては同名草台の石棺群は甕棺等、弥生式文化中期に比定すべき曙期古墳であると主張した。然してこれを裏すける如く今回の第三調査区附近で甕棺二個が開拓中に発見され興味を引いたのである。今回名草台の千人塚古墳が開拓中の墓地に占定されることに決定したことを契機に名草台の実測、千人塚古墳の発掘及び既掘の石棺の実測を実施し、其の状況を検討することになつた。

## 二名草台の発掘調査

千人塚古墳の発掘及び二名草台の石棺群の調査は三月二十七日より四月三

日まで八日間に亘たつて実施した。調査団は別府女子大学講師賀川

光夫を発掘擔當者とし、調査員として九州大学助教鏡山猛、杵築高

等学校教諭入江英親、別府女子大学助手佐藤曉一等を以て組織、地本

森町公民館久留島主事、相良書記等を中心とし、開拓団員の熱心なる作

業により作業実施。調査期間中大分県社会教育課藤田主事の発掘現状

視察等がたり、調査は調査団、町当局の協力にて予期以上ノ成果を挙げ

て終了した。発掘は台上の千人塚古墳の墳上にトレンカを設定、基

壇主体部を檢對する一方、古墳の外形調査等を平行して実施した。主

体部に於ては墳頂より一米八〇程にして組合式石棺一を發見調査、人

骨四体と勾玉始め櫛などの遺物を發見、棺内の実測等精密な作業を完

了した。

施 外形と共に古墳時代中期末葉の築造であることを推定した。又

一方第二区と稱する石棺露出ヶ所に於ては五米平方の地域に十一個

の石棺の実測等を行った。この第二区に於ては板状の安山岩を使用

した組合式石棺には注目すべきものがなく、遺物も破壊墳である為

散逸したものが全く存しなかつた。特に密集石棺中の四、六号石棺

は、破壊をまぬかして居り石棺の状況を知るための好資料となつた

が、いづれも遺物は存せず特筆すべきものではなかつた。尚人骨は

一号、六号、十一号、十二号、十四号に破壊をまぬかれ、一部又は

全部が残存しておたことは幸であつた。この第二調査区は千人墳古

墳を取りまく往時の社会華状を物語る有力な資料として興味深いも

があつた。名草台中央の第三調査区は甕棺(甕生後期)と箱式棺の共存

關係を調査するため重要な地区でありながら、いづれも開拓により

破壊されたものの実測と残部との調査に止まった爲に重要な資料とはならなかつたことは残念であつたが、第三区一号石棺の床面に甕棺に平行する跡生式時代の柱穴を發見し一處甕棺と石棺の間に層位の存することゝが判明したことは重要な發見であつた。これにして名尊台上の考史學的資料は大々的な發掘調査にはならねばならず、今後の調査に注目しなげればならぬ。

### (三) 調査の結果

調査の結果特筆すべき事はこの廣い合上に共存する甕棺と石棺が全く時代を異にするものであることが判明したことが第一に擧げねばならぬ。この事實は又東九州地方に於ては甕棺と箱式棺が同時期に共存しないと云ふことの証明にもなり、北九州とは可成り様子のかわつた古墳發生の檢査に貴重な資料となつた。又森盆地を中心とする地方に於ては甕棺

は弥生式後期に影響されて發生するもので、この地域以東の東九州沿岸  
地域に於て後期の甕棺以前のものを見ないこと等の理論を立證するもの  
であらう。次にこの夥しい石棺の群集する名草台地に於て唯一ツ千人塚  
古墳が一壘封土を有する高塚であるのと多少遺物を有するに注目する。  
然し千人塚古墳の被葬者は九州大学解剖学教室で調査の結果四体である  
ことが判明したが、少くとも夥しい石棺群と比して階級を認められる。  
この石棺に僅かな遺物しか発見出来なかつたことは注目すべきである。  
又この高塚をさへへる石棺の群集のしかたに就いてはまさに注目すべき  
で第二調査区に於ては五米平方に十一個の石棺破壊前にはこれに密接し  
て多数の石棺が存したと云ふことが各側壁を接して配して居る事は筆者の知  
見では稀有なことであつた。尚この夥しい石棺中に一物の遺物も存しな  
かつたと云ふ事は千人塚古墳の僅かな遺物と共に注意を要するものであ

(四) 遺物

遺物は千人塚古墳以外の石棺群からは一物も発見されなかつたが千人塚古墳よりは左の遺物が発見された。

一 勾玉 二個 赤瑪瑙 棺内 人骨頭蓋下より発見

二 管玉 十五個 碧玉 全 右

三 小玉 十三個 青硝子 全 右

四 櫛 六個 竹製 全 人骨左右より発見

五 釧 二個 鉄製 全 内北側壁下より発見

六 鏃 一個 [片] 鉄製 全 右

以上の遺物は鏡の発見は得られなかつたが余体として先年大分県臼杵市下山古墳発見の遺物と近似するもので興味深いものがあつた。

## 結論

今回の調査に於て第一に注目されたことは古墳の立地状況が極めて環境の良好な位置に存すると云ふことであり、同時に先代の住居跡附近に占地され精密な調査によつなければ先代遺物と同一視せられる恐れが充分存すると云ふ点にある、即ち当遺跡に對て視表面調査に於て且て大分大学は石棺が弥生式時代の曙期古墳であると推論したことは好例で考古学の調査が極めて慎重を必要とすかを物語る良い反省資料となつた。次に石棺群の密集の状況であるが、この問題は当古墳に多少の時代の差を考へねばならず組合式石棺が庶民墳とは考へられないことである。即ち当時の推定人口と必ずしも一致しないことになる。即ち可成り多数の一般庶民の墳墓は如何なる場所にとのやうな遺跡の遺構のみに行われたかと云ふことに就いては本調査では不明であ



った。又千人塚古墳と箱式棺の間には多少階級が認められたが、本  
域に於ては其の差があまり存しないやうに考へられる。以上は本  
の調査に於て検討せられたことであり、本調査を基礎として関係資料を  
研究の上改ためて論文を作成する積りである。

### 歴史学的研究

本調査は総合調査として歴史学的検討を必要とし、この方面の調査は  
調査員 大分大学助教富来隆が担当した。然して其の成果を期待す  
る。

### 遺物の保存

千人塚古墳全見の遺物の保管は論文作成送別村女子大學生代文化研究  
所に於て資料として保管、研究終了と同時に森町公民館に永久保管の

希望があるが、擔当者として適当な處置と考へ資料保管を森町に依頼し